

大好きな台湾、高雄での留学体験記

氏名	野村 花乃
学部/研究科・学年（留学時）	法文学部人文社会学科・3年
留学国名	台湾
留学期間	5ヶ月
実施年月	2025年8月29日～2026年1月31日

1. はじめに

5か月間の台湾留学を終え、無事に帰国することができました。この留学期間中、語学力の向上だけでなく、異なる文化や価値観に触れることで、多くの貴重な経験を得ることができました。また、もともと関心があった台湾、そして高雄という地域をもっと大好きになりました。本報告書では、留学を志した理由や現地での学び、生活、そして留学を通して感じたことについて振り返りながらまとめていきます。

2. 留学をしようと思った理由

私が今回の交換留学を志望した理由は、主に二つあります。

一つ目は、台湾における行政制度や政策形成の実態を現地で学び、比較行政学的な視点を養いたいと思ったからです。現在、大学では行政学を専攻しており、特に政治への住民参加やスマートシティ政策に関心を持っています。台湾は、住民との距離が近い行政運営や、ITを活用した先進的な政策の導入に積極的に取り組んでおり、日本とは異なる行政の在り方を学ぶことができる貴重な地域であると考えました。

二つ目は、台湾について幅広い分野から学びを深めることです。私は大学1年次に台湾での研修に参加した経験があり、現地の学生との交流や日台関係に関する学びを通して、台湾の文化や社会に強い関心を持つようになりました。その経験をきっかけに、より長期間、現地で学生として生活しながら学びたいと考えるようになりました。今回の留学を通して、台湾人のアイデンティティや台湾華語、生活文化などについても理解を深め、多角的な視点から台湾を捉えられる力を身につけたいと考えました。

3. その大学を選んだ理由

まず、私が留学先として高雄を選んだ理由は、過去の経験と生活環境の両面から、自分に最も合った都市であると感じたためです。大学1年次に高雄科技大学の学生との研修プログラムに参加した際に、高雄に友人ができたことがきっかけとなり、この都市に親しみを持つようになりました。その後、台湾の他の都市にも旅行で訪れましたが、高雄は一年を通して温暖な気候で過ごしやすく、交通機関も発達しており、生活面でも非常に暮らしやすい都市

であると感じました。そのため、留学生活を送る場所として、高雄が最も自分に適していると考えました。

また、留学先の大学として国立高雄大学を選んだ理由の一つは、国立大学として教育水準が高く、学術的な信頼性が高い点に魅力を感じたからです。台湾において国立大学は研究・教育の質が安定しており、教員の研究水準も高いことで知られています。そのような環境の中で学ぶことで、より専門性の高い知識を身につけることができると考えました。

さらに、国立高雄大学は、人文社会科学部、法学部、管理学部、理学部、工学部の五つの学部を有する総合大学であり、幅広い分野を横断して学ぶことができる点も大きな魅力でした。特に、人文社会科学部や法学部は、私が所属する愛媛大学法文学部で学んでいる分野と関連が深く、これまでの学びを活かしながら、より多角的な視点を養うことができると考えました。専攻分野にとらわれず、幅広い学問領域に触れられることは、留学ならではの大きなメリットであると感じています。

加えて、国立高雄大学は国際交流にも力を入れており、留学生の受け入れ体制が整っている点にも魅力を感じました。多くの留学生が在籍しているため、台湾だけでなく、さまざまな国や地域の学生と交流する機会があり、異文化理解を深めることができると考えました。このような国際的な環境の中で学ぶことは、自身の視野を広げるうえで大きな経験になると感じ、同大学を留学先として選択しました。

4. 留学先で学んだこと（授業の様子）

本留学期間を通して、国立高雄大学における多様な授業に参加し、日本の大学とは異なる学習環境の中で学ぶ経験を得ることができました。1学期間に言語系（中国語・日本語）のものを3科目、自分の専攻や興味に関係するものを3科目、の計6科目15単位を履修しました。各授業では、筆記試験に加えて、口頭試験、レポート、プレゼンテーション、フィールドワークなど、さまざまな形式で学習成果が評価されており、知識の習得だけでなく、主体的に考え行動する力が重視されていると感じました。

まず、言語系の授業についてですが、交換留学生向けの中国語の授業を履修しました。内容は基礎的なものでしたが、台湾人の先生が指導してくださるため、正しい発音や自然な使い方を学ぶことができました。また、会話スキルに特化した授業であったため、中国語によるペアワークやプレゼンテーションを通して、コミュニケーションの手段としての中国語を実践的に学ぶことができました。この授業は交換留学生向けであったため、授業内でインドネシアやタイなどさまざまな国の学生と交流する機会があり、台湾以外の文化についても理解を深めることができました。日本人学生が多い環境ではありましたが、できるだけ他国の留学生とも積極的に交流するよう心がけました。

また、日本語の授業も履修しました。この授業では、日本語の文章を中国語で学ぶ形式が

採用されており、中国語学習にも大いに役立ちました。現地学生向けの授業であったため、授業中に先生が使用する中国語は自然な表現が多く、授業内容に関わらず聞き取れた言葉をメモすることで、学習に活かしていました。さらに、毎回ペアワークが行われたため、隣の席になった台湾人学生に自分から中国語で話しかけ、会話練習や友人作りのきっかけとしました。日本語の授業を受講している学生は、もともと日本語や日本文化に関心を持っている人が多いため、帰国後も連絡を取り合いながら、お互いの言語や文化を学び続けやすい環境でした。私は帰国後も、授業を通して仲良くなった学生と頻繁に連絡を取り合い、学習を継続しています。

自分の専攻や興味に関する科目については、「台湾でしか学べない内容であるか」「フィールドワークやグループワークなど、他の学生と交流する機会があるか」という二つの基準をもとに選択しました。また、大学の掲示板を利用して、担当教員や授業の評判についても事前に調べました。実際に履修した講義の担当教員はいずれも親切で、留学生である私に対して、課題や授業内容について配慮してくださりました。

台湾の歴史ある地域に向いて文化を学ぶフィールドワークの授業では、カキの養殖と漁業で栄えた歴史を持つ「蚵仔寮」という観光漁港や、台湾最初の近代的な製糖工場跡地である「橋頭糖廠」を訪れました。現地では、歴史的建造物や展示資料を見学しながら、台湾地域の歴史について学びました。授業内では、ベトナムの正規留学生と仲良くなり、授業中で興味深かった台湾文化やベトナムとの違いについて話すなかでより授業への理解を深めることができました。また、授業外でも一緒に勉強したり、お互いの国のレストランに連れて行って文化を共有したりと交流を深め、現在も連絡を取り合っています。彼女たちは中国語が堪能なので、会話の中で中国語を学ぶ機会にも恵まれました。お互いに学習者であるため、ネイティブを相手に話すよりも心理的な負担が少なく、わからないところは教え合いながら一緒に高め合う関係を築くことができました。

台湾の現代までの発展過程を国際的な視点から学ぶ授業では、講義が英語で行われるため、歴史に関する英単語がわからず苦勞する場面が多かったです。しかし、先生は授業スライドを修学支援システム上で公開してくださるので、授業時間外で復習することで対応しました。授業内容は日本による統治時代についても多く取り上げられ、日台の歴史的なつながりの深さを再認識しました。また、プレゼンテーション課題では、インドネシア出身の学生四人とグループを組み、台湾の食文化が国際的に認知されるようになった経緯について調査・発表を行いました。言語の違う仲間とテーマ決めから役割分担まで授業時間外で進める必要がある点はとても難しく感じましたが、異なる背景を持つ仲間と協力して発表を完成させた経験は、他者を理解し、協同する力を養う上で大変有意義でした。

メディアリテラシーと市民の政治参加に関する授業も履修し、情報を正しく扱う能力の重要性について学びました。台湾の事例を中心に、グループディスカッションや調査活動を行うことで、台湾のメディア環境や民主主義政治の仕組みについても理解を深めることが

できました。特に、中国による情報侵略に関する講義は印象的であり、日本とは異なる課題を抱える台湾だからこそ、学生を含め、より一層メディアの動向に注意を払う必要があると感じました。本授業はすべて中国語で行われ、毎回ディスカッションも実施されたため、留学生である私にとって難易度の高い内容でしたが、日本語学部の台湾人学生のサポートを受けることで、理解を深めることができました。

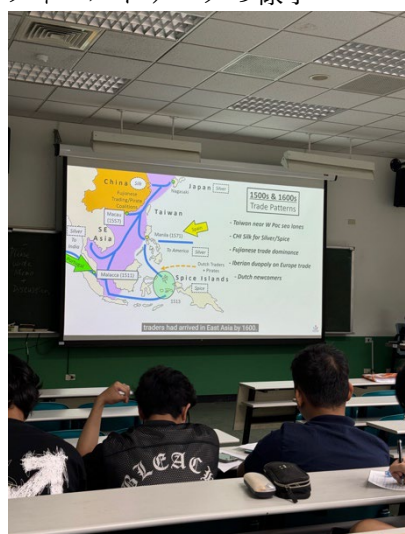
外国で授業を受けることは、言語面や文化理解の面で困難を感じることも多くありましたが、周囲の学生や先生方と良好な関係を築くことで、不安を軽減し、前向きに学ぶことができました。日本以外の国で授業を受けることで、同じ内容を学んでいても、新たな視点や発見が得られると実感しました。留学先では語学習得のみにとらわれるのではなく、現地でき学べない知識や価値観を大切に、積極的に理解しようとする姿勢が重要であると感じました。



フィールドワークの様子



日本語授業のペアワーク



普段の授業の様子



ベトナムの友人と人生初のベトナム料理

5. 現地での生活（交通や食事）

台湾には「Ubike」というシェアサイクルがあり、街の至る所や高雄大学の学部の建物ごとにも駐輪スペースが設けられています。このシェアサイクルは、留学生や現地学生を問わず多くの人に利用されており、台湾での生活に欠かせない存在であると感じました。また、台湾の中でも高雄・台北・台中には、MRT と呼ばれる地下鉄のような交通機関が整備されており、簡単に街中を移動することができます。高雄大学からは MRT 駅との間を往復するバスが出ており、週末に友達と高雄市内へ遊びに行く際によく利用しました。台湾では、「悠遊カード」と呼ばれる交通系 IC カードが利用されており、コンビニなどでさまざまなデザインのカードを購入することができます。このカードは、MRT やバス、鉄道に加え、Ubike の利用やコンビニでの支払いにも使用でき、大変便利です。また、このカードは学生証にも組み込まれており、学生証を使って公共交通機関の支払いができる点も魅力的でした。

道路の特徴としては、日本とは逆の左側通行であることに加え、バイクの数が非常に多い点が挙げられます。老若男女問わず多くの人がバイクを利用しており、朝夕の通勤・通学時間帯には、主要な道路がバイクで溢れるほどでした。そのため、交通事故も多く、日本ではあまり見られない光景であることから、日本人留学生は特に注意が必要であると感じました。一方で、台湾のバイク文化のおかげで楽しい経験をすることもできました。バイクは公共交通機関では行きにくい地域へも移動しやすく、街の雰囲気をも身近に感じることができます。私はバイクを所有している友人が何人かいたため、よく後ろに乗せてもらって出かけていました。交通ルールを守り、安全に配慮した上で利用すれば、台湾ならではの日常を体感できる貴重な経験になると感じました。

台湾の代表的な料理には、ルーローハン、水餃子、牛肉麵などがありますが、これらは現地の人々にも日常的に親しまれています。台湾は夜市や飲食店の価格が比較的安く、外食文化が発達しているため、学外の飲食店で食事をしたり、デリバリーを利用したりすることが多くありました。また、台湾は飲食店の数や種類が非常に多い点も印象的でした。台湾料理だけでなく、アジアをはじめとするさまざまな国の料理店があり、食の多様性を感じました。日本料理店も多く、すき家や丸亀製麺、スシローなどの日本のチェーン店に加え、台湾の方が経営する日本料理店も見られました。さらに、ベジタリアン向けの飲食店も多く、日本と比べて食事の選択肢が非常に豊富であると感じました。

加えて、台湾はドリンク文化でも有名ですが、実際に滞在してみて、その種類の多さを実感しました。各店舗のメニューも豊富で、甘さや氷の量を調整できるため、自分の好みに合った飲み物を選びやすい点が魅力的でした。ドリンクスタンドで大量に購入し、集まりの場に持参する光景もよく見られ、大学の留学生オリエンテーションなどでもドリンクが配布されていました。このような点から、台湾ならではのおもてなし文化を感じることもできました。

台湾で生活し始めたばかりの頃は、蛇口の水を飲むことができないことや、飲食店で水ではなく甘い紅茶が出されることなど、日本での当たり前がそうではないことに困惑する場面もありました。しかし、台湾での生活が長くなるにつれて、そのような違いにも次第に慣れ、現地で暮らしている実感が湧くようになりました。また、高雄市内の交通の利便性や、台湾の食事選択の多様性など、「魅力的だ」と感じる文化にも数多く出会うことができました。これらは、旅行のような短期間の滞在ではなく、交換留学生として約5か月間台湾で生活したからこそ気づくことができた貴重な経験であると感じています。



MRT



退勤時間帯のバイク



台湾のソウルフード「ルーローハン」



台湾のくら寿司



U bike

6. 留学先で楽しかったこと、辛かったこと

留学生活の中で最も印象に残っていることの一つは、新たな環境で多くの出会いに恵まれたことです。言語が異なる友人と、言葉だけでなくその場の雰囲気や表情を通して、同じものを「面白い」「楽しい」と共有できた瞬間は、些細なことでも大きな喜びを感じました。友人と会う回数を重ねるうちに、お互いを理解し合い、次第に深い話ができるようになったことも印象に残っています。自分自身を受け入れてもらっていると実感できたことで、安心して留学生活を送ることができました。現在でも留学後に連絡を取り合っている友人がおり、この出会いは今後も大切にしていきたいと考えています。

また、自身の語学力の成長を実感できたことも大きな収穫でした。留学当初は、中国語を声に出すことさえ緊張し、思うように話すことができませんでした。しかし、自分の拙い中国語にも真剣に耳を傾けてくれる友人と出会い、少しずつ自信を持って話せるようになりました。最終的には、翻訳機を使わずに中国語を共通言語として友人と出かけたり、自分から遊びに誘ったりできるまでに成長しました。さらに、毎日続けていた中国語日記も、当初は完成までに1時間ほどかかっていましたが、5か月後には約20分で書き終わられるようになり、語彙力や表現力の向上を実感しました。

加えて、現地で少し離れた地域まで足を運び、新しい景色や文化、食事に触れられたことも楽しい経験でした。一人で飲食店に入り注文できるようになったことや、交通機関を乗り継いで目的地まで行けるようになったことなど、現地での生活に慣れていく過程を実感できたことは、大きな自信につながりました。

一方で、留学生活の中で最も辛かったことは、当初自分が掲げていた目標と、実際の留学生活との間に生じた乖離でした。私は、台湾やさまざまな国の学生と交流し、日本では身に

つけにくい中国語の会話力を伸ばすことを目標としていました。そのため、最初のオリエンテーションでは10人以上の交換留学生に積極的に声をかけました。しかし、実際には中国語で会話できる留学生はほとんどおらず、日本人留学生の人数も多かったため、日本語で過ごす場面が多くなってしまいました。この状況は、私が思い描いていた留学生活とは大きく異なっていました。また、自分自身も台湾人学生に積極的に話しかけられるほど中国語力に自信があったわけではなく、目標をどのように達成すればよいのか悩む時期が続きました。

そこで私は、環境を待つのではなく、自ら行動することの重要性を意識し、日本語の授業の中でペアワークがある科目を受講しました。そして、毎週隣になった学生に必ず自分から中国語で話しかけることを目標に設定しました。授業内での会話をきっかけに連絡先を交換し、共通の話題があればメッセージを送り、テスト勉強を一緒にしようと誘うなど、少しずつ関係を築いていきました。その取り組みを約5週間続けた結果、次第に私のことを知ってくれる学生が増え、台湾人4人グループが昼食や外出に誘ってくれるようになりました。中国語を「聞く・話す」環境を自ら作り出すことができました。

この経験を通して、留学当初と比べて中国語能力が大きく向上しただけでなく、困難な状況に直面した際に、自ら課題を分析し、行動によって解決していく力を身につけることができました。本留学経験で培った主体性と問題解決力を、今後の学業や進路に生かしていきたいと考えています。



台湾学生4人と最後の夜ご飯



同じ学期に留学した交換留学生の仲間とバディの台湾学生

7. 終わりに

5ヶ月間留学生生活はあっという間に過ぎて行ったように感じます。しかし、留学前に想像していた以上に多くの学びと経験を得ることができました。なかでも、留学期間中に出会った友人の存在は、私にとって最も大きな財産となりました。私は、もともと初対面の相手に自分から積極的に話しかけることが得意な性格ではありません。しかし、留学先では知り合いが一人もいない状態から生活が始まり、自ら関係を築いていく必要がありました。そのような環境の中で、勇気を出して人と関わり、信頼関係を築いていく経験ができたことは、自分自身の大きな成長につながったと感じています。言語の壁に直面し、挫けそうになることもありましたが、自分の拙い中国語や英語にも真剣に耳を傾け、温かく受け入れてくれた友人たちの存在は、私に大きな自信とさらなる学習意欲を与えてくれました。

留学のように、全く新しい環境に飛び込むことは、とても勇気がいることだと思います。これまでの自分のやり方が通用せず、自信を失ったり、悩んだりすることもありました。しかし、だからこそ、自分の殻を破り、新しい自分に出会うことができる環境なのだと感じています。周囲の人は誰も自分の過去を知りません。「私にはどうせできない」「そういう性格ではない」といった思い込みに縛られることなく、新しい自分に挑戦することができました。今回の留学で得た経験は、語学力の向上だけでなく、自分自身と向き合い、成長するための大きな糧となりました。

そのため、これから留学を考えている方には、ぜひ一歩踏み出して挑戦してほしいと思います。留学は、語学力を高めるだけでなく、自分の価値観や考え方を見つめ直す機会にもなります。異なる環境に身を置くことで、日本にいただけでは得られない経験や出会いがあり、自分自身の可能性を広げることができます。勇気を出して挑戦した先には、必ず自分にとってかけがえのない財産となる時間があると感じています。

最後に、本留学の実現にあたり、ご支援いただいた大学関係者の皆様、現地で支えてくださった先生方や友人、そして温かく送り出してくれた家族に、心より感謝申し上げます。多くの方々の支えがあったからこそ、充実した留学生活を送ることができました。この留学で得た経験と学びを糧に、今後も努力し、さらに成長していきたいと考えています。